

2021 年度国際ユース作文コンテスト

【若者の部】 文部科学大臣賞（最優秀賞）

## 大地からの教え：命とは何か、どう生きるべきか

（原文は英語）

ハー・ビック・ドン（24 歳）

ベトナム<カナダ在住>

マニトバ大学

2020 年 9 月。私はレッド川沿いを歩いていた。清々しい秋の空気を吸い、水の流れの音に浸りながら。遠くには、ノーウッド橋の欄干に結ばれた赤いリボンが見えた。リボンは血のように赤く、川岸に並ぶ楓林の紅葉に溶け込んでいた。一本一本のリボンが、行方不明になった、あるいは殺された先住民族の少女や女性を表している。命とは何だろう。数百年前からいまだ止むことなく、先住民族の命が入植者の手によって奪われてきた。入植者たちはさらに、野牛を殺し、森を壊し、大地を汚した。母なる大地や、その大地が創り出した人間を超えた万物の命には、人間の命ほどの価値はないのだろうか。命について、そして人間と自然の関係性について、西洋中心の植民地的な見方をしているうちは、植民地的な慣習に基づく捉え方やあり方を踏襲してしまう。つまり、開発の名の下に環境から搾取するやり方を続けていくことになる。それゆえに、私は大地に目を向けて、命とは何か、どう生きるべきかを学んでいる。



一度、アニシナアベ族の長老に会い、命の意味と目的について大地から学べと教わったことがある。母なる大地は、命は循環していると教えている。人間はこの命の循環の一部であり、森羅万象とつながり合っているのだ。人間同士、そして人間と自然の間に互いを尊重する関係を築いていくという生命観だ。私たちの存在は、大地、水、自分たちが何者であるかという認識、そして歴史が交差する場所に根づいた哲学と切り離すことはできない。

紅葉した楓林に目を向けると、命とは共に共同体を築くことに他ならないと木々が教えてくれた。緑色のコケとオレンジ色のキノコが木の幹に生えている様子を眺めながら、人間の存続は互いの、そして自然との関係にかかっていると改めて思い知らされた。気候危機、ブラック・ライブズ・マター (BLM) 運動、米国でのアジア系アメリカ人に対するヘイトクライム (憎悪犯罪) の最中で、私は黒人や先住民族の人々、有色人種のコミュニティが互いに連帯し、抑圧的なシステムを打破するべく力を合わせる姿を目にしてきた。限りある資源を獲得するために争うのではなく、公平さに欠けた今の社会構造と暴力的な文化を断ち切り、平和な未来を（再）構築するのだ。

レッド川のほとりにたたずんだとき、命とは過去、現在、未来をつなぐことだと大地は教えてくれた。私はカナダ、ウィニペグに一時滞在しているが、私が住むこの土地は、元々はアニシナアベ、クリー、オジ=クリー、ダコタ、デネ族の人々の土地であり、メティ国の土地だ。この土地は、ヨーロッパの入植者たちが到着する何千年も前からここに住む、先住民族の人々の物語を伝えている。この地では、先住民族の人々が環境と調和して生きてきた。この地では、偏狭な世界観から、白人とその富や権力以外のすべてを軽んじる入植者によって、多くの先住民族と人間以外の命が奪われた。この地では、真実と和解の取り組みが始まり、関係性と平和の構築に向けて地域社会が動き出している。この地には、痛みと心の傷だけではなく、癒しと希望がある。

西洋の教育制度では、生命とは生体内作用を備えた有機体固有の性質であると教える。しかしカナダの先住民族は、土、水、岩、木など人間を超えた万物もまた、霊が宿る生命だと信じている。こうした世界観は、人間と自然の関係性を根本から覆す。私たちが、人間は他を凌ぐ生き物だと捉えるなら、すべての物を人間の発展に役立つ資源と見なすことになるだろう。しかし、私たちが、人間はあらゆる物とつながり合う命の循環の一部であると捉えられれば、あらゆる命と命の多様性を尊重することを学ぶだろう。発展に対する私たちの考え方を、富の蓄積を目指す終わりのないプロセスから、持続的な平和の構築を目指す絶え間ないプロセスへと変えなくてはならない。

確かに、生きることには困難が伴う。そして、矛盾に満ちている。それでも、連帯して立ち上がり、過去の加害を認め、現在の抑圧的な社会構造を打破していこう。これからの世代のために、平和を尊ぶ公平で持続可能な未来を築いていくのは私たちがなのだ。